

# BBC・ガーデナーズ・ワールド・ ライブ・2003に植物画を出品して

角田葉子(日本ボタニカルアート協会委員)

## 1. 会場のバーミンガムへ

2003年6月11日から15日までイギリスのバーミンガム市で開催された「BBC・ガーデナーズ・ワールド・ライブ・2003」というBBC放送主催、RHS(英国王立園芸協会)共催のガーデニング・ショーに植物画(ボタニカルアート)を出品することになり、6月8日に成田を発った。その日のうちにロンドンに着きユーストン(Euston)駅近くのシッスル・ユーストン・ホテルに泊まり、翌9日、バーミンガム(Birmingham)に向かった。

バーミンガムはロンドンのユーストン駅から急行で1時間24分で着く商業都市で、NEC(National Exhibition Center)というイベント会場があり、ここがガーデニング・ショーの会場であった。駅から会場まで歩く歩道やエスカレーターで直接つながっている大規模な会場で、ドッグショウや商業見本市も開催されるそうだった。広大な敷地の中に太い道路が通り一方にガラス張りの建物、反対側にプレハブの建物があり、その外もガーデニングの見本園が並んでいてスタッフが忙しく準備中であった。植物画の展示スペースはガラス張りの明るい建物内で、わたくしには3mのスペースが与えられた。これは予め申し込み許可されたスペースである。

## 2. 搬入、展示は自分で

翌日10日が準備の日で、日本で額装して持参した植物画10点を計画してきたとおりに配置した。これまでもロンドンのビンセントスクエアー

(Vincent Square)にある RHS のホールで開催されたウェストミンスター・フラワー・ショーに出品したことはあったが、今回はツバキ属の原種にしぼって10点を用意した。原種に関連して2001年11月発行の「カーチス・ボタニカルマガジン」(英国王立キューガーデンの機関紙)に掲載されたカメラリア・フラバ(ベトナムの黄花ツバキ)の論文(箱田博士・ニン博士共著)とわたくしの絵とをコピーして原種の一つとして展示に加えた。午前11時ごろから作業を始めて午後2時ごろまで、思ったよりも時間がかかってしまった。というのは、いざ作業にとりかかってみると踏み台が必要で探し回ったからである。近くのスタッフにきいても「あら、持ってこなかったの。」と言われ、わたくしは「日本から来たので。」と事情を説明したところ、親切に他のスタッフのところに連れて行ってたずねてくださった。しかし、「担当が違う。」とかでなかなか踏み台が借りられない。とうとうその方がどこからか探してきてくださり「危ないから気をつけて使ってね。」と貸してくださった。古い木製で確かに危ない感じだけけれど、お陰で高い所に手が届いて、無事展示することができた。もう一つお陰で「step-ladder」(踏み台)という単語を覚えることができた。なにしろ「ステップラダー。ステップラダー。」と探し回ったので。

### 3. 初日のにぎわい

さて、宿泊は車で10分ぐらい離れた「グリムストック・カントリー・ハウス」というカントリーホテルに泊まり、会期中毎朝、ホテルが紹介してくれたタクシーで会場まで送ってもらった。運転手さんは気持ちのいい人で道中「あなた方は晴れの日を運んできてくれた。先週はずっと雨だった。」とか「エリザベス女王は二つの誕生日をもっている。一つは生まれた日の誕生日で、もう一つは六月、パレードのための誕生日。一年中で六月が一番晴れの日が多いから。」などと遠来の客のためにいろいろ解説し、もてなしてくれた。初日は晴れで会場に着くと広い駐車場にバスや乗用車が次々乗り入れ、人々がぞくぞくと押しかけて来ていた。屋外のガーデニングの展示はこの5日間の展示のために池を作ったり、流れを作ったりかなり大

工事をして造園のデザインを提案している。これらもコンペの対象なので造園業者は「今年はこの路線で。」と自負してデザインし展示しているに違いない。日本の植物は人気があるらしく、まずカエデの赤い葉が目についた。小さな滝を配した水辺にギボウシが白い花穂をつけ手前にアヤメを植えた日本的な庭(図1)もあった。屋内の展示場にも水辺に植えた斑入りのギボウシを見かけた。造園の最高賞「メルセデス・ベンツ賞」を受賞した庭は白と青の四角い大きな石の彫刻二つを浅い水に置き周辺にイグサとアヤメをあしらったシンプルなかつ堂々としたデザインの庭だった。



図1 キボウシを植えた日本風の庭園

#### 4、「ベスト・ボタニカル・アーティスト・BBC・ガーデナーズ・ワールド・ライブ・2003」クリスタルトロフィー受賞

わたくしが今回展示した作品は、

1. リンゴツバキ 屋久島産、ヤブツバキの変種で実が大きい
  2. ユキツバキ 新潟県加茂市産 (赤花)
  3. 宛田紅花油茶 中国産
  4. 攸県油茶 中国産
  5. 平果金花茶 中国産
  6. サルウインツバキ 中国産
  7. ユキツバキ 新潟県東蒲原郡鹿瀬町産 (赤花)
  8. ユキツバキ 新潟県東蒲原郡鹿瀬町産(白花)
  9. ヤブツバキ 青森県平内町・ヤブツバキの北限自生地産
  10. カメリア・ペテロッテイー ベトナム・タムダオ国立公園産
- のツバキ属原種 10点である。

どの作品も絵のモデルにした個体は原種として信頼できる個体である。日本ツバキ協会の会員や学者のご協力を得て描くことができた。初日の午後一時ごろ審査の結果の通知書が各出品者に配られ、わたくしは「シルバーギルトメダル」であった。これは銀に金メッキしたメダルという意味で「ゴールドメダル」より下、「シルバーメダル」より上の賞である。これまでと同じで、ややがっかりしてまた館内の展示や講演を見てもどってきたところ、若い女性のスタッフが「2時に授与式があるのでここで待つように。」と知らせに来た。しばらくして背の高い男性とカメラマン、そして先ほどのスタッフが来て「あなたが、ベスト・ボタニカル・アーティストなのでトロフィーを授与し

ます。」とクリスタルトロフィーを授与(図2)された。RHSのロゴマークであるリンゴの木がクリスタルに彫られ、金属の文字版に「BEST BOTANICAL ARTIST BBC Gardeners' World Live 2003」と刻まれている(図3)。背の高い男性は Sir Richard Carew Pole・President the Royal Horticultural Society (サー・リチャード・ポール RHS 会長)だと後で知った。会長自ら受賞者のもとに向いてトロフィーを授与するという気軽さに驚いた。多分「メルセデス・ベンツ賞」の受賞者のもとにも出



図2 RHS会長よりトロフィーを授与



図3 クリスタルトロフィー

向いて授与したにちがいない。受賞者を一堂に集めて表彰式を行うのではなく、会長が特別賞の受賞者を一人一人訪れて表彰式を行うことは、お客の応対に忙しい出品者の時間を無駄にしないで済み、格式にこだわることなく祝福できるとても実利的な方法で好感がもてた。メダルの受賞者には証書が配られるだけで、後日、名前を刻んだメダルが送られてくる。前回と同じメダルのときは証書のみである。この点も驚きであると同時に現実的だと感じた。イギリスという国のお国柄には時々戸惑うことがある。古いものを大切に守る国とっていると、その一方で思いがけなく新しいものをすばやく取り入れる、進取の気取りを感じることもある。多分、合理的精神にもとづいているものと思う。

## 5、バーミンガムのギャラリーとミュージアム

せっかくバーミンガムに来たのだから市内観光もしたいと思いギャラリーとミュージアムに出かけた。市の中心部にあるギャラリー（美術館）とミュージアム（博物館）は渡り廊下でつながっていて一つの建物になっている。バーミンガムは産業革命の頃はガラス工業が盛んだったそうで、精巧なガラス製品が多数展示されていた。わたくしがいただいたクリスタルトロフィーや他の部門のクリスタルボウル（器）はこの伝統的な産業を受け継いだ製品かも知れないと思うと、あらためてバーミンガムでのクリスタルトロフィー受賞が意義深いものを感じられた。シンフォニーホールでの音楽会も楽しんだ。女性のバイオリニスト、ジーン・ジャンセンの演奏でメンデルスゾーン作曲・バイオリンコンチェルトなど、親しみのある曲ですばらしかった。

## 6、RHSに出品するには

RHSのフラワーショウはほとんど毎月開催されており、その内の植物画部門は11月と1月と2月で2002年からバーミンガムでの6月が加わった。RHSに出品するにはまず4点以上の作品で予備審査を受け、合格すると5回まで出品できる資格を得る。その後毎年会期を選んで申し込み、出品

できる会期が決定する。1回の出品作品数は8点以上で、テーマを決めても良いし決めなくても良い。「科学的な作品が適当である。」と募集要項に記されている。テーマの決め方はさまざまで、「ツバキ科」などと科や属で統一したり、「道端の草」「つる性の植物」などと、科や属とは別の共通性でまとめたものもあった。

2000年2月にロンドンのウェストミンスター・フラワー・ショーに出品したときに日本と関係のあるらしい業者が「スハマソウ(俗名ユキワリソウ)」の花つきの苗を、土を盛って飾りつけ展示即売しているのを見た。着物姿のお嬢さんがお客の応対をして大変な人気であった。このような出展がどのような手順でできるのかはわたくしは知らない。有名なチェルシー・フラワー・ショーに造園の部門で日本から出展するのを予備審査から本番の出展まで手伝ったという日本人に会ったことがある。申し込み、予備審査合格、出展のための植物の調達とかなり大変のようであった。

## 7、最終日のにぎわい

さて、5日間の会期が終わりに近づくとあちこちで人だかりができ、ざわめきが興る。展示に使われた植物が格安で販売されるので、それを買いたいものを楽しみに人々が集まって来るのである。クレマチスやペラルゴニューム、カラスムギの穂を細く繊細にした感じのイネ科の草などを揺らしながら楽しげに帰る人々が目についた。海外旅行者でなければわたくしも買いたいものだと思った。庭に置く陶器製の人形・小人の妖精「ノーム」を格安で手に入れ、毎朝送ってもらったタクシーに来てもらい搬出を終えた。6月のイギリスは晴れの日が本当に多く、会期中1回激しいシャワー(にわか雨)に会っただけだった。草むらに野生のジキタリスが鮮やかな紅紫の花穂をつけ、遠くの畑の周りにはオレンジ色のコモン・ポピーが群生して明るいのどかな光景だった。



図4 新潟県加茂市産ユキツバキ(角田：展示作品より)

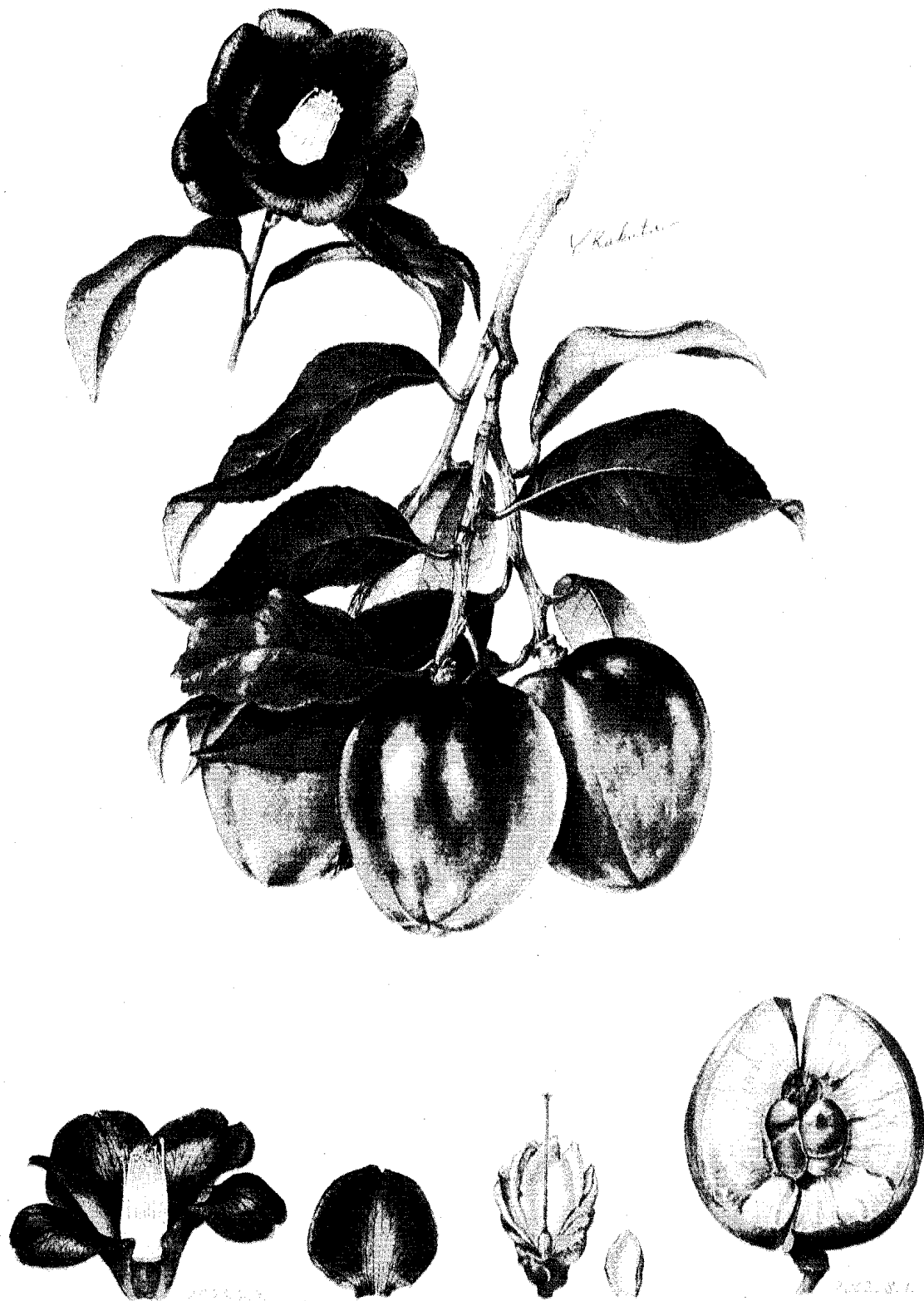


図5 屋久島産リンゴツバキ(角田：展示作品より)